

## 大腸がん健診で早期発見を

日本人の死因の第1位は「がん」で、その上位を占めるのは、肺がん、胃がん、大腸がんです。年間約4万人が大腸がんで亡くなっています。患者数も増え続けています。しかし、大腸がんは早期に発見して適切な治療をすれば、治る可能性の高いがんと言われています。ぜひとも、大腸がんの早期発見に努めましょう。

大腸がんの症状としては、血便や便通異常、腹痛、腹部膨満感などがありますが、やっかいなことに、早期の大腸がんでは自覚症状はありません。そこで、何の症状も無い時でも「大腸がん検診」を受けましょう。

大腸がん検診は、40歳以上の市民が対象で、問診と検便（便潜血検査）です。たいへん簡単で、何の苦痛もありません。

検便は、決められた容器と方法で、2日（2回）大便を採取します。便潜血

検査とは、便の中に血液が混じっているかどうかを調べる検査です。目で見てもわからない程度の出血でも反応します。

この検診で、何らかの異常や疑いのあった場合は、精密検査を受けることになります。

精密検査としては、大腸のレントゲン検査（注腸造影検査）や大腸の内視鏡検査（ファイバースコープ検査）があります。

大腸がんの治療法には、内視鏡治療、手術治療、抗がん剤など薬による治療、放射線治療などがありますが、早期の大腸がんでは、内視鏡治療が可能な場合が多く、体への負担が少なくてすみます。

「大腸がん検診」を受けて、大腸がんの早期発見に努めましょう。

平成21年12月

村田 省吾